

人間の條件

—— 映画文学人生論

原作：五味川純平（1949-51）「三一書房」
監督：小林正樹(1959-61) 参考：『虚構の大義』
出演：梶 仲代達矢 脚色：松山善三 小林正樹
美千子 新珠三千代 撮影：宮島義勇
影山 佐田啓二 音楽：木下忠司
沖島 山村聡 吉良上等兵 山内明

諦めよ、我が心、獣の眠りを眠れかし

映画『人間の條件』全六部の上演時間は九時間三十一分で、『戦争と人間』の九時間二十三分より長い。やはり戦争ものだが、タイトルが示す通り、人間の条件を問う。

人間の条件とはなにか？ 人間を人間として人間らしく扱うヒューマニズムの立場をとることが条件ではなからうか。その立場は時と場合によっては国家の大義に反して、非国民と罵られることもあるが、その立場をとらないかぎり、ひとでなし、獣、あるいは鬼だと『人間の条件』の梶あるいは『虚構の大義』の杉山は考えていたようだ。むろん、人と人が殺し合いをする戦争には反対の立場をとる。数字に強い彼の計算によれば、昭和十五年度の鉄鋼石油など基礎的戦略物質の日本間の比較は七二・四対一だった。この数字からは日本に勝ち目はない。が、現実には米英中蘭と交戦中で、しかもソ満国境でソ連とにらみ合っている昭和十八年に反戦を叫ぶわけにはいかない。やむをえず、招集免除してもらうことを条件に満州の老虎嶺鉱山で労務管理の仕事をするようになる。現地人の工人たちは苛酷な労働条件をしいられていた。

梶は彼等を人間らしく扱って、生産意欲をたかめようとしたが、現場監督は現地人を労働搾取することしか考えていない。ついに抗議事件を引き起こした七人の特殊工人（捕虜）が見せしめのた



人間の条件

映画文学人生論

め、斬首の刑に処せられることになった。

七人のうちの四人目が処刑されようとする寸前に梶は耐えきれなくなって、「やめてくれ！」と叫んだ。ヒューマニズムの叫び声だったが、時すでに遅く、三人は斬首されていた。これでは中途半端なヒューマニズムであり、人間の条件を果たしたとはいえない。

おまけに、軍部に反抗したという理由で、憲兵隊のリンチで半死半生の目にあわされた上に、職場をクビになり、召集令状をつきつけられた。

反戦ヒューマニズムの立場をとる梶は蒼白いインテリではない。射撃の達人で、兵士としてもすぐれていた。満州東部国境各地を転々とし、一九四五年八月のソ連軍の満州侵攻で、所属部隊が全滅した時でも生き残った。苛酷な状況で生きのびるには獣にならなければならないこともある。

しかし、ついにソ連軍に捕らえられた。銃もない。「諦めよ、我が心、獣の眠りを眠れかし」という一行のボードレールをつぶやいて眠った。人生は一行のボードレールにも若かないと言って死んだ芥川龍之介のように。

五味川純平が体験をもとにフィクションとして表現したのが『人間の条件』であり、ドキュメントとして誌したのが『虚構の大義 関東軍私記』である。よくぞ生き残り、書いてくれたと思う。

戦争が廊下の奥に立つてゐた 渡辺白泉